

# ノンフィルムの森③ イタリア国立映画博物館

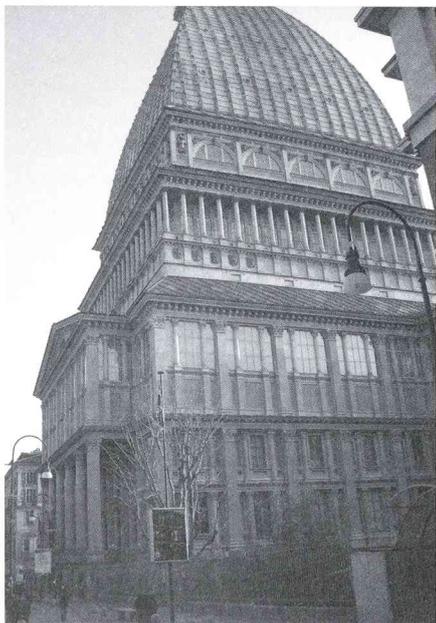
岡田 秀則  
Hidenori Okada

連載:

フィルム・アーカイブ  
の諸問題  
第70回

承前

何とも不思議な都市である。この分野では国際的に名の知れた組織とはいえ、市の中心部にそびえる映画博物館が街のいちばんの観光施設とは、世界でもこのトリノだけではないだろうか。今回、フランスをベースにノンフィルム資料の現在を調査しようとした筆者が、一つだけ国境を越えてでも訪れたかった場所が、イタリアの国立映画博物館(Museo Nazionale del Cinema)であった。トリノはフランスに接したピエモンテ地方の中心都市であり、博物館のスタッフも、少なからぬ人たちがフランス語を自在に話す。創設者のマリア・アドリアーナ・プロロも、シネマテーク・フランセーズを創設したアンリ・ラングロワの盟友であり、映画保存史から見てもトリノはパリから近い場所だったわ



映画博物館のある「モーレ・アントネリアーナ」

けである。

博物館は「モーレ・アントネリアーナ(Mole Antonelliana)」という市内全体を見渡せる19世紀の高い塔の中に作られており、中心の吹き抜けを囲む各フロアの四角い回廊が博物館のスペースとして活用されている。その吹き抜けの中央には、頂上の展望台へ直行するエレベーターが設置されているため、いわば観光用のタワーと映画博物館が合体しているといってよい。意外な取り合わせではあるが、2000年にここで開館して以来、2008年10月までの8年間で約360万人の入場者を数えているという。大成功というよりないだろう。

## 館内逍遙

まずは、訪問者として博物館の中を散策してみよう。ロビーやミュージアム・ショップのある1階から階段を上がって2階のフロア「映画の考古学」に足を踏み入れると、無数の幻燈機(マジック・ランタン)のほかにカメラ・オブスクラ、ディオラマ、ファンタスマゴリア、プラクシノスコープ、テアトル・オブティークなど、プロローロの収集したプレシネマ期のさまざまな視覚装置が所狭しと並べられている。ステレオスコープ系の機材などは、展示ケースの中でひしめくほどの量だ。だが、さらに筆者を驚かせたのは、19世紀の写真術の発展を示す、映画史ではなく写真史に属する機材類である。これはもともとこの分野の専門家であったプロローロの関心と研究の深さを示すとともに、トリノがかつてイタリアの写真産業の中心であったという事実も反映している。これらの幻燈機はケース内で展示されているだけでなく、当時のものをそのまま使った自動映写も行われ、現代につながる生きた文化として紹介されている。また、ミュートスコープ(手回し式のパラパラ漫画覗き機)をはじめ多くの視覚遊具が手動で動くようになっており、個々の映画作品の資料以前に、こうしたマシーナリーがこの博物館の基盤コレクションであることが分かる。

3階の「映画の寺院」に上がると吹き抜け部分が大きな広場になっており、上から垂らされた2つの大スクリーンに、トーキー映画と無声映画が絶えず35mmフィルムで上映されている(トーキー映画の音声はリクライニング・シートのイヤホンから出る)。広場の周囲には「貴族のサロン」「マッド・サイエンティストの研究室」な

ど映画セット風の部屋がいくつも作られており、いわばこの博物館の“ディズニーランド”的な要素とも言えるが、超大作『カビリア』(1914年)に捧げられた一室にはオリジナルの衣裳やセットで使われた巨大な彫像の複製も展示され、偉大なる初期イタリア映画へのプライドも匂わせている。また4階の「映画機械」は映画作りの各パートにかかわる資料の展示で、製作・脚本・監督・撮影・美術・衣裳・編集といった職能を象徴するさまざまな資料が並ぶが、中にはチャールズ・チャップリンの帽子、マリリン・モンローの下着、『スター・ウォーズ』(1977年)のダースベイダーのお面、フェデリコ・フェリーニの直筆デッサンといったポピュラーな品々も頻りに姿を見せている。

そして「4階半」ともいえる回廊に「ポスター・ギャラリー」がある。シネマテーク・フランセーズの項でも述べた通り、ヨーロッパの映画ポスターは、それ自体がグラフィック作品としても成立するという文化を持つが、当然ながら、それと同時に個々の映画の文脈を背負って生を享けた媒体でもある。つまりこうしたポスターを眺めることは、画家たちの感性を味わうと同時に、ポスターがいかに映画作品の世界を表現しているか、その巧みに魅了される体験でもある。ギャラリーには各国別のコーナーが作られており、さすがにイタリア映画のコーナーはその栄光の歴史を回顧するに足るコレクションの厚みに圧倒される。他にも、ジャック・タチ監督の『のんき大将 脱線の巻』(1949年)の大型のオリジナル版、グラウベル・ローシャ監督の傑作『黒い神と白い悪魔』(1964年)のフランス語版、イェジー・スコリモフスキー監督『出発』(1967年)のイタリア語版など、50万枚を超すコレクションから選ばれたポスター芸術の粋が、視覚的な快楽とシネフィリーという、二重の愉しみに身を浸すことのできる濃密な空間を形作っている。

こうして全体の展示を眺めていると、真摯な歴史研究とディズニーランドとシネフィリーをどった煮にする、という大胆な発想に脱帽せざるを得ない。筆者が一つ残念だったのは、最上階のフロアで開催される企画展会場に入場できなかったことである。その前週まで開催されていた企画展「フランチェスコ・ロージ展」が終わったばかりで、次の「ロドルフォ・ヴァレンティノ展」(ここでは「ロドルフ」ではない)を控えた

展示替えの時期だったためである。なお、企画展が3か月から4か月に一度のペースで入れ替えられるのは、フィルムセンターとほぼ同じサイクルである。

### プロローロの遺産—先駆的コレクション

この博物館をプロローロが最初に構想したのは、イタリアをファシスト政権が支配していた戦時中の1941年のことである。プロローロはトリノの映画産業に関する文献を集める機関の設立を計画したが、敗戦の後には当初の枠を超えた様々な映画資料が集まることとなった。1953年には映画博物館協会を設立、1958年には市の中心部にあるキアブレゼ宮に博物館がオープンしたが、建物の老朽化のため1983年に閉鎖、以後は常設の公開場所を持たないまま1991年にプロローロは逝去する。その翌年にその遺志を継いだ「マリア・アドリアーナ・プロローロ財団」が生まれて再開館を準備、現在のモーレ・アントネリアーナに移転してオープンしたのは2000年のことである。2004年にはダヴィデ・フェラーリオ監督が、博物館の夜警を務める青年を主人公にした『トリノ、24時からの恋人たち』を手がけ、一般的な知名度をさらに高めたばかりか、2006年のトリノ冬季オリンピックに際しては常設展を大幅に拡充、現在に至っている。

この最大の特徴は、通常のノンフィルム保存機関が、「フィルムの他にノンフィルムも収集している」のに対して、ここではまずノンフィルムが優先的に収集され、フィルムの収集や上映活動はむしろ付随的な事業とされていることである。約16,000本の所蔵フィルムをベースに上映事業を行うチネテカ部門があり、博物館のすぐ近くにある映画館「チネマ・マッシモ」の3スクリーンの一つを使って博物館の所蔵フィルムを上映しているが、メインの所蔵品はあくまでノンフィルムである。

まず、この博物館のコレクションの大きな特徴は、「映画の考古学」フロアにあるプレシネマ期の機材も含めて、約23,000の立体資料が保存されていることである。1990年代には英国の収集家・映画史家ジョン・バーンズ(1920-2008年)旧蔵の幻燈機コレクションが加わっており、このプレシネマ系機材はまさに世界一の規模と言える。

また、写真担当のロベルタ・バザノ氏に博物館の写真コレクションのことを伺ったが、ここでも興味深かったのは写真史家でもあったプロローロの収集方針である。86万枚ある写真のうち、映画関係は75万枚で、残りの11万枚は映画以前の写真史に属するプロローロ旧蔵のものだという。中には初期のダゲレオタイプ写真もあり、映画博物館でありながら実質的には19

世紀写真のアーカイブでもあるこの組織のバックボーンを優れて示している。ただし、スチル写真の一部が通常の空調しかない事務所の一角で保存されているなど、安定した保存場所が確保できていないのが悩みの種だという。

またこの博物館は、資料を活用した出版活動にも注目すべき点が多い。中でも特筆すべきは、ローマのチネテカ・ナチオナーレと共同して、イタリア映画屈指のスチル写真の第一人者アンジェロ・フロントーニ(1929-2002年)の作品の権利を買い取ったことである。1957年以来40年以上にわたってイタリア映画界で活躍したフロントーニの写真は55万枚以上にのぼる。現在は博物館の事業に自由に利用できるようになり、展覧会に使用されるだけでなく独自に写真集も発行している。例えば2007年に刊行されたフロントーニの2冊組の写真集は、片方がイタリア女優のポートレート集、もう片方はジャン・リュック・ゴダール監督『軽蔑』(1963年)のカプリ島ロケーションの撮影スナップ集であり、後者などは撮影現場の雰囲気を生々しく伝える魅惑的な一冊となっている。現在、博物館ではフロントーニ作品のデジタル化プロジェクトが進んでおり、今後はさらに円滑な活用が期待される。

### 新しい図書館—ノンフィルム文化の地域性

映画博物館附属の図書館へ向かう。博物館本体が市の中心のやや東側にあるのに対し、こちらは南西部の庶民的な地区に置かれている。移転して2008年9月に再開館したばかりだが、責任者のシルヴィオ・アロヴィジオ氏によれば、わざと博物館とは別の地区が選ばれたという。その正式名は、トリノの全国紙「ラ・スタンプ」で長年健筆をふるった評論家にちなみ「マリオ・グロモ図書館(Bibliomediateca Mario Gromo)」という。蔵書はアドリアーナ・プロローロの旧蔵図書に始まり、1910年代にトリノを拠点としたイタラ社の資料、同社で『カピリア』を演出したジョヴァンニ・パストローネの資料(『カピリア』を書いた文学者ガブリエレ・ダヌツィオ直筆の書簡もある)、そしてグロモの旧蔵図書などの文献に、日常的な寄贈と新規購入の文献を加えたものだ。映画人資料はチネテカ・ナチオナーレに集中しているため決して多くはないものの、レナート・カステラーニ、マルコ・フェレリ、フランチェスコ・ロージ、エリオ・ペトリというイタリア現代映画を形作った監督たちの一次資料が集められている。

この図書館は、シネマテーク・フランセーズ図書室ほどの機能性は感じさせないが、なかなか雰囲気があり居心地がいい。それは所蔵資料の規模がフィルムセンター図書室に近いからでもある。図書は28,000冊と、フィルムセ



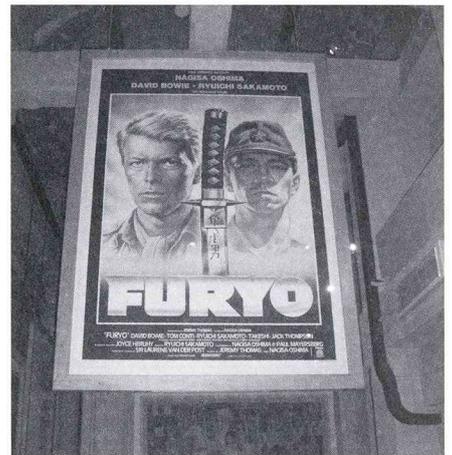
「映画の考古学」フロア

さまざまな形態をした幻燈機(マジック・ランタン)の数々。創立者のプロローロと映画史家ジョン・バーンズの旧蔵品が合流し、博物館の幻燈機コレクションはますます充実した。



ポスター・ギャラリー

エルストルビッチ監督の『天使』(1937年)と『ニノチカ』(1939年)のイタリア版ポスター。『ニノチカ』のポスターは戦後のものだが、むしろ『天使』のデザインの方に洗練された色合いが見られる。



ポスター・ギャラリー

『戦場のメリー・クリスマス』(1983年)のイタリア題は「Furyo」(俘虜)。奥には『のんき大将 脱線の巻』(1949年)のポスターも見える。

ンター図書室の蔵書数とかなり似通っている(ただし雑誌は約10万冊という大規模である。映画を扱った雑誌は映画雑誌以外でもすべて収集するというプロローロの方針によるもの)。図書以外の、整理中の資料がかなり残されている点も似ており、奥の資料整理室へ入ると若い二人の男性スタッフが乱雑に積まれたプレス資料の整理をしていた。これもフィルムセンターで見慣れた光景である。閲覧室には蔵書検索端末やビデオブース、映画関連データベースの閲覧端末が置かれており、小回りの利く作りになっている。

そしてここでは、イタリアならではの“ノンフィルムの文化”と対面することができた。図書館



図書館の閲覧室

所蔵図書は、一定の開架図書と大多数の閉架図書からなる。コピー機のほか、スキャナーを自由に使えるようにしてあるのは珍しい。壁の写真はスチル写真家フロントーニによる『軽蔑』の撮影スナップ。博物館は、フロントーニの膨大な写真をさまざまな事業に活用している。

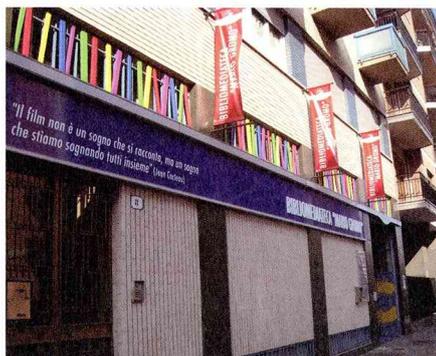
の蔵書の中でとりわけ特徴的だったのが、1930年頃に始まった「チネロマンツォ (Cineromanzo)」、つまり写真入りの映画ストーリーブックである。もともとは映画館のない地域の人のために作られたもので、当初はストーリーの説明だけだったがその後スチル写真も入って豪華になり、1950年代には最盛期を迎える。戦後イタリアの出版文化の中でも特異な地位を占めたが、やがて下火になり、成人映画専門となったのち、1970年頃に消滅したという。このように、各国・地域の大衆文化を語るに際して、映画刊行物のローカリズムはこれからの研究テーマとして重要度を増すだろう。戦前期の日本の劇場が「映画館プログラム」を、また戦後の映画配給界が劇場窓口で販売する「パンフレット」を生み出し、やがて映画愛好者の間でそれらを集める文化が生まれたように、イタリアの民衆にとって“映画への窓”であった「チネロマンツォ」もある時代の生活文化

そのものであったことだろう。

映画博物館への訪問を終えてまず感じたのは、「映画」と「人間の日常生活」を有機的に結び付けるマテリアルとしてノンフィルム資料を考察すること、そして過去100年以上にわたる私たちの暮らしのモードとして“映画”を捉えることの大切さであった。それは、今の日本の映画言論の中で必ずしもよく言及される主題とは言えないだろう。しかし、いわゆる作品論ばかりではなく、映画をめぐる言論の形をより多様にするには映画アーカイブの責務でもあり、ノンフィルム資料はそのために能弁な武器となるだろう。展覧会や資料との出会いという形で映画を深く思考できる場所、トリノという街は、フィルムを見つめるだけでは到達できない視座からも映画文化の厚みを見せてくれる、爽快な土地であった。

次号に続く

(フィルムセンター主任研究員)



マリオ・グロモ図書館の正面

トリノ市南西部の下町地区にある。「映画とは人が語る夢ではなく、みんなと一緒に見る夢である」というジャン・コクトーの言葉が掲げられている。



チネロマンツォの表紙画像を使ったパネル図書館の正面と閲覧室を結ぶ屋外通路に、拡大された「チネロマンツォ」の表紙が飾られている。手前から『知りすぎた男』『裏窓』『理由なき反抗』。

# fiaf

東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイブ連盟 (FIAF) の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ  
<http://www.momat.go.jp/>



フィルムセンター携帯電話用  
 ホームページ  
<http://www.momat.go.jp/nfc/k/>

お問い合わせハローダイヤル  
 ☎03-5777-8600

「NFCニューズレター」第87号  
 (2009年10月-11月号/隔月刊)

発行・著作:

独立行政法人 国立美術館/東京国立近代美術館◎

編集:

東京国立近代美術館フィルムセンター

〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6

☎03(3561)0823

制作:

印象社

発行日:

2009年10月1日

\* 無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER

Bimonthly

(Volume XV No.4 October-November 2009)

Published and Copyrighted by  
 The National Museum of Modern Art, Tokyo ◎  
 (Independent Administrative Institution National  
 Museum of Art)

Edited by

National Film Center

(The National Museum of Modern Art, Tokyo)

Add.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Tel.: 03(3561)0823

Designed and Produced by

Insho-sha

Date of Publication:

October 1, 2009

\*No part of this publication may be reproduced or  
 reprinted without the approval of the publisher.